

敦煌本諸雜抄の研究

本 多 至 成

一、はじめに

敦煌莫高窟の十七号窟見耳洞より発見された仏教文献の多くは中原仏教の三蔵を書写した写本である。しかし、写本は願主を皇帝、貴族、庶民におく祈願請求のための写本があるが、供養以外の写本として、多くの論書、律典の写本が存在する。これら論、律の写本の中には吐蕃の支配期に唐制が廃止され、その影響下に、吐蕃独自の仏教形成のため研鑽された典籍も数多くあったことが判明する。翻訳、注釈、集成など数多くの学問組織を経由した成果が敦煌出土文献の中に残されている。

これら学問的組織の中心に位置しているのが曇曠であり、法成 (chos can) といった人々であった。そこで私は法成に関する文献を整理し、『大乘四法経』とよばれる一群の經典が法成に関する文献として重要であること、また法成の集成とされる『大乘四法経論及廣釋開決記』(S. 216, S. 2817, P.

2794, P3007, 詳. 30, 附. 42) の中に吐蕃支配期の敦煌の仏教組織の一面を垣間みることが出来るのではないかと考えたのである。その推考の中心となったのは法成が『大乘四法経論及廣釋開決記』に引用した『眞實論』と名づけられた未伝の論書であった。

法成文献に引用された『眞實論』なる書物を敦煌文献中に検索して行くと、『金剛般若経疏』(P. 2330)、『維摩経疏』(大正藏經卷第 16 冊 雜阿含部 維摩經疏)、『金剛般若経旨讚』(S. 2774, S. 2782) などに『眞實論』が引用されていることが判明した。さらに、その引用論疏の範囲は中原仏教にも及んで『仁王護國般若波羅蜜多疏』上 (大正藏經卷 33, 429, a) や『大方廣佛華嚴経疏』五 (正續 884, 44, 下) などにまで影響を与えていることを知り得たのである。

これら『眞實論』に係って敦煌や中原で活躍した法成、曇曠、道氾、良賁、澄觀、浄源といった人物誌が注目されると共に、敦煌及び河西一帯の仏教交渉の状況を把握する必要がある。

ある。吐蕃が安祿山の乱の際に一時的ながら長安を占拠したのは七六三年、吐蕃は河西回廊の都市を東から攻略、涼州は七六四年、甘州は七六六年、瓜州は七七六年に陥落した。敦煌のある沙州は一年間の攻防に堪えながらも七八一年ついに吐蕃に屈した。そして土豪であった張義潮が吐蕃軍を追放するまで（八四八年）吐蕃の河西支配は続いた。曇曠は沙州陥落の前後に長安よりこの地に移住している。吐蕃軍の戦火に追われて敦煌へ脱れた僧尼も数多くいたにちがいない。曇曠が『眞實論』の存在を明記している『金剛般若経旨讚』は

彼が戦火を避けていた靈州で著わされているから、敦煌に入る（遅くとも七六四年までには敦煌の地に入っていたとされる）以前の著述で、その後、涼州で『大乘起信論廣釋』、甘州で『大乘起信論略述』を著わしたのち敦煌の地に到着している。法

成により引用された『眞實論』が敦煌以外の地、靈州で曇曠によつて引かれていた。このことは吐蕃支配期の河西一帯にインド・チベット系の仏教が、かなり根強く研鑽されていたことを示す証拠となるかもしれない。曇曠は晩年、敦煌を占領したチベットのチソンデツェン王（七四二〜七九七）より下問を受けるほど高名な学僧であった。王は占領者の特権を利用して仏教興隆のためインド、中国の高僧を召集した。しかし、当時中国で台頭していた頓悟禪の教義はインド僧の説く仏教とは相容れないものであった。両仏教の対立に王はイン

ド僧、カマラシーラを招いて、この騒動は解決したとされる。実はこのインド僧、カマラシーの著述にも『眞實論』の名が出てくるのである。それは Kanasiḥa が Santarasiya (敦煌 680 頁 740) の書 'Tartvasaṅgraha' を注釈した。'Tartvasaṅgraha of Santarasiya with the commentary of Kanasiḥa' vol 1 に "Paramārthasaptarka" と "七十眞實論" の名で出る。

法成所引の一論書の問題は、中原仏教、インド仏教の交渉という点にまで及んでいる。しかも法成の集成である『大乘四法経論及廣釈開決記』は中原に入蔵されている『大乘四法経』とは異なる敦煌独自の『大乘四法経』が依用されるという事実も認められている。菩薩思想を説く経典の解釈をアビダルマ文献の思想で着色するのである。

二、大毗婆沙論雜抄の問題

敦煌出土の仏教文献の中には、敦煌での教学仏教の実際を知らせるが如き文書が見受けられる。辺境の地である敦煌において、高度で、新しい仏教を学ぶには造詣の深い学僧と文献が必要である。文献は仏教経論であるが、逐字的講義録の場合もあるし、学僧の講述を自在にメモする場合もあり、また翻訳、集成、著述といった高度な文献操作を必要とする場合もあった。

ここで、特に注目しておきたいのは敦煌文書には「諸論雜

- 19 結縛隨眠煩惱纏何所決撰謂蘊界處緣起諦食及沙門果善
 - 20 提分等尊者弘護作如是說阿毗者是助言顯現前義此法能□一切
 - 21 善法謂諸覺分皆現在前故 名阿毗達磨尊者覺天作如是說阿毗
 - 22 者是助言顯增上慢者阿毗達磨增上覺者名阿毗覺
 - 23 增上老者名阿毗左此亦是此法增上故名阿毗達磨尊者左受
 - 24 作如是說阿毗助言顯恭敬□如恭敬檀首者名阿毗檀首恭敬
 - 25 養者名阿毗供養此亦是此法尊重可恭敬故名阿毗達磨
 - 26 問何故此論名發智耶答諸勝義智皆從此發此爲初基故名發
 - 27 智復次此論名智安足處 諸勝義智此爲根本依此而立是
 - 28 故名爲智足處復次諸勇健智此取能發勇力□緣故名
 - 29 發智復次諸智彼岸依此能到故名發智開發諸法自相共相死
 - 30 有能□此論者故復次世出世智皆依此發智之妙門故名發智
 - 31 問此論勝利其相云何答隨順解脫斷除繫縛順空死我達
 - 32 我々所顯死我理遮數取趣開覺意思昏迷遺愚癡生□慧
 - 33 斷疑網與決定背雜染向清淨詞流軛轡還滅捨生死□□
 - 34 鑿摧破一切外道邪論成立一切佛法正論此論勝利其相
- (各行上段の1…34に番号及び大正藏經は筆者付)

紙背文書であるペリオ本の婆沙論の序は、紙面最後の記述部分に特色が見られる。現行の婆沙論の序には玄奘などによる刊記が存在する。P. 2362 端を見ると、本来、刊記も書写されていたと思われるが、この部分が故意に削除された形跡がある。

何故に P. 2362 端ではこの部分が欠落しているのであろうか。このペリオ本は法成が著わした四法経の注釈で、法成自

身が用いた婆沙論巻頭の序に相当する部分である。吐蕃支配期の敦煌仏教は、中原仏教の影響を最小限に抑え、敦煌独自の仏教の構築をめざしていた。

七八八年三月敦煌に住む僧尼数三一〇人が一三ヶ寺といくつかの僧院で学んでいたが、八四八年頃までに僧尼数は千人近くになっていったとされるから、敦煌は僧尼であふれていたと思われる。これら僧尼に対して敦煌独自の仏教を興すために、教学樹立の必要性が布告されたであろう。教学の再編にアビダルマ仏の受容は最も便利で簡易な方法であったにちがいない。それはインド仏教と中国仏教を視野に入れうる敦煌仏教独自の道を開く可能性を秘めているからである。P. 2362 端の序文末の刊記削除は、敦煌仏教確立にはすでに中原仏教の翻訳者、筆受者等の刊記が必要とされないことを示したものと考えたい。

三、俱舍論雑抄の問題

『阿毘達磨俱舍論』は婆沙論と共に、アビダルマ論書の双璧である。敦煌出土の仏教資料の中にも俱舍論の名を多く見る。

敦煌での婆沙論は仏教の講義、研究のために書写されているが、俱舍論の書写本の中には写経に相当する程、丁寧に書写された俱舍論もある。スタイン本の『阿毗達磨俱舍論卷七』(S. 6506)がそれである。S. 6506 は一九紙にわたり、一紙約

一九行、一行に一七文字が筆により楷書体で清書されている。世親菩薩の手に成る俱舍論は写経、造経と同じ尊崇をもって扱われたものであったのであろうか。

ここでいう俱舍論雜抄はもう一つの敦煌仏教の側面を説くものである。スタイン本 S. 249 には『阿毘達磨俱舍論』とあって俱舍論の要文を抄出している。スタイン本全四紙と背面三紙にわたり諸論の要文を書写する。

敦煌本 S. 249 を現行の俱舍論と比較してみる。

阿毘達磨俱舍論卷第四

以下法生時并其自體三法俱起。第一本法。第二法得。

第三得得。謂相續中法得起故成成就本法及與得得。得得起故。成成就法得。是故此中無窮過。如是若善若染汚法。一一自體初生起時并其自體三法俱起。第二刹那六法俱起。謂三法得及三得得。第三刹那十八俱起。謂於第一第二刹那所生諸法有九法得及九得得。如是諸得後後轉增。一切過去未來轉有無邊得且一有情生死相續刹

惱及隨煩惱并生得善刹那刹那相應俱有無始無終生死輪轉有無邊得且一有情生死相續刹

敦煌本 S. 249

以下法生時并其自體三法俱起第一本法第二法得第三得得謂相續中法得起故成就本法及與得得得起故成就法得。是故此中無窮過。如是若善若染汚法一一自體初生起時并其自體三法俱起第二刹那六法俱起謂三法得及三得得第三刹那十八俱起謂於第一第二刹那所生諸法有九法得及九得得。如是諸得後後轉增。一切過去未來煩惱及隨煩惱并生得善刹那刹那相應俱有無始無終生死輪轉有無邊得且一有情生死相續刹

惱及隨煩惱并生得善刹那刹那相應俱有無始無終生死輪轉有無邊得且一有情生死相續刹

惱及隨煩惱并生得善刹那刹那相應俱有無始無終生死輪轉有無邊得。且一有情生死相續刹那刹那起無邊得。如是一切有情相續一一各別。刹那刹那無量無邊諸得俱起。如是諸得極多集會。無對礙。故互相容受。若不爾者。一有情得虛空不容。況第二等 (T 29・23・c)

得と非得について論じている。經量部では非得の存在を認めない。有部では私が何かを得る時、得というものが存在して私をつなぎつけているという。法が生ずる時には自体に本法と大得、小得三法が俱起する。第二刹那には六法(三法の得と三得の得)、第三刹那には一八法が俱起する。無始無終の生死の輪廻には無辺の得が存在するという。

阿毘達磨俱舍論第五 分別根品 第二之三

敦煌本 S. 249

此有生生等。於八二有能論曰。此謂前說四種本相。生生等者。謂四隨相。生生往往異異滅滅。諸行有爲由四本相。本相有爲由四隨相。豈不本相

如所相法一一應有四種隨相。此復各四展轉無窮。無斯過失。四本四隨於八於一功能別故。何謂功能。異法作用或謂士用。四種本相一一皆於八法有用。四種隨相一一皆於一法有用。其義云何。謂法生時并其自體九法俱起。自體爲一相隨相八。本相中生除其自性生餘八。隨相生於九法內唯生本生。謂如雌鷄有生多子有唯生一。生與生生生八生一其力亦爾。本相中住亦除自性住餘八法。隨相住住於九法中唯住本住。異及滅相隨應亦爾。是故生等相復有相。隨相唯四無窮失。經部師說何緣如是分析虛空。非生等相有實法體如所分別。所以者何。無定量故。謂此諸相非如色等有定現比或至教量證體實有。若爾何故契經中言有爲之起亦可了知。盡及住異亦可了知。

一應有四種隨相此復各四展轉無窮無斯過失四本四隨於八於一功能別故何謂功能異法作用或謂士用四種本相一一皆於八法有用四種隨相一一皆於一法有用作義云何謂法生時并其自體九法俱起自體爲一相隨相八本相中生除其自性生餘八隨相生於九法內唯生本生謂如雌鷄有生多子有唯生一與生生生八生一其力亦本相中住亦除自性住餘八法隨相住住於九法中唯住住異及滅相隨應亦爾是故生等相復有相隨相唯四無窮失經部師說何緣如是分析虛空非生等相有實法體如所分別所以者何無定量故謂此諸相非如色等有定現比或至教量證體實有若爾何故契經中言有爲之起亦可了知盡及住異亦可了知如而汝等執文迷擬薄伽梵說擬是所依何謂此經所說實義謂愚夫類無明所言於行相續執我我所長夜於中而生航著世尊爲斷彼執著故顯行相續體是有爲及緣生性故作是說有三有

天愛汝等執文迷擬。薄伽梵說擬是所依。何謂此經所說實義。謂愚夫類無明所言。於行相續執我我所。長夜於中而生耽著。世尊爲斷彼執著。故顯行相續體是有爲及緣生性。故作是說。有三有爲之有爲相。非顯諸行一剎那中具有三相。由一剎那起等三相不可了知。故非不可了知。應立爲爲相。故彼契經復作是說。有爲之起亦可了知。盡及住異亦可了知。然經重說有爲言者。令知此相表是有爲。勿謂此相表有爲有。如內居白鷺表水非無。亦勿謂表有爲善惡。如童女相表善非善。諸行相續初起名生。終盡位中說名爲滅。中間相續隨轉名住。此前後別名爲住異。世尊依此說難陀一言。是善男子善知受生善知受住及善知受衰異壞滅。說頌言

(T 29 · 27 · b)

爲之有爲相非顯諸行一剎那中具有三相由一剎那起等三相不可了知故非不可了知應立爲相故彼契經復作是說有爲之起亦可了知盡及住異亦可了知然可重說有爲言者令知此相表是有爲勿謂此相表有爲有如內居白鷺表水非無亦勿謂表有爲善惡如童女相表善非善諸行相續隨起名生終盡位中說名爲滅中間相續隨轉名住此前後別名爲住異世尊依此說難陀言是善男子善知受生善知受住及善知受衰異壞滅說頌言

この一段は生住異滅の四相について四相自体が有為法であるから、他の四相に遷せられる必要があるので無窮の難に至る。これについて有部が八一有能説を出す。根本の相である生相に対して生相を生ぜしめる生生相という或る種の力(隨相)を認めるのである。ではこの生生相の隨相に更に四相がかかるかという、それは元に戻って本相がこれを生ぜさせるのだと。本相と隨相は同時因果であつて互いに作用するから隨隨相など考える必要なしという。生相は所相の法である

本法と生生相乃至住相以下滅滅相に至るまで八個を生ぜしめ、滅相も八個を滅せしめる。これに対し、生生相はただ生相の一のみを生ぜしめるのである。有部では一刹那に本法・四本相・四隨相の九法俱起するという。このような有部の刹那生滅説に対して経量部は一期生滅説に重点をおく。

有部が聖量を以つて起(生相)の实在を主張するのに対して経部は、天愛(如而愛)よ汝らは文に執われて義に迷つて

いる。といい四相の仮立を主張する。

ところが、S. 249では長行に続いて「本无今有生 相續隨轉住 前後別住異 相續斷名滅」の頌文が書き写されている。そこで『阿毘達磨俱舍論』卷五(T. 29.27. c)の当文を見ると、四句一頌の頌文が三つ並記されているが、スタイン本の筆者は第二頌のみを書写し、第一頌と第三頌は取り上げていない。この頌文の主張者は経量部師である。経部師は四相は

一期生滅で考えるのがよいが、刹那生滅で理解しても四相は成立すると会通する。一々の刹那に於て本无今有を生とし、有已還無を滅とし、後々の刹那に次いで起るのを住とし、その前後で差別あるのを異と言つてよい。これが経部師の主張である。スタイン本の筆者はこの頌文の存在を高く評価しているのである。

阿毘達磨俱舍論第六 分別根品 第二之四

經部師説。一切無爲皆非實有。如色受等別有實物。此所無故。若爾何故名虛空。唯無所觸説名虛空。謂於暗中無所觸對。便作是説。此是虛空。已起隨眠生種滅位由簡擇力由闕緣故餘不更生名非擇滅。如下殘衆同分中天者餘蘊。餘部説。由慧功能隨眠不生名爲擇滅。隨眠緣闕後苦不生由慧能名非擇滅。離簡擇力此滅不成故此不生即擇滅攝。有説。諸法生已後無。自然滅故名非擇。如是所執非擇滅體應是無常。亦無常非擇爲先方有擇滅如何

未_レ滅無故。豈不_三擇滅擇爲_レ先
故先無後有應_二亦無常_一。非_三擇
爲_レ先方有_レ擇滅_一。如何擇滅亦
是無常。所以者何。非_三先有_レ擇
後未生法方有_二不生_一。何者。不
生本來自有。若無_レ簡擇_二諸法應_レ
生。簡擇生時法永不_レ起。於_二
此不起_一擇有_二功能_一。謂於_二先時_一
未_レ有_二生障_一今爲_二生障_一非_レ造
不生。若唯不生是涅槃者。此
經文句當云何通。經言。五根
若修若習若多修習。能令_二過去
未來現在衆苦永斷_一。此永斷體
即是涅槃(T 29・34・a)

無爲無因果論を説明する。三無爲法は能作因であるが結果
を有しない。択滅無爲は離繫果であるがそれを生じる原因を
有しない。無爲は無因果で非因果でない。經部師は無爲は因
ではないし、色受等の如き実有物でもない。無爲法は無体で
あるからという。有部師はでは何故虚空等と名づけるのかと
反問する。經部師は触對する所なきを虚空とし、現行の惑が
滅する時、択力によつて惑、後有の生じない所で択滅とする。
ただ能生の縁を欠くため生じない所をさして非択滅とする。そ
有部が信等の立根を修すれば三世の衆苦を永断せしめる。そ

擇滅亦是無常所以者何非先有
擇後未生法方有不生何者不生
涅槃本來自有若無簡擇□□□
□□□□法永不_レ起於此不起
擇有功能謂於先時未有生障今
爲生障非造不生□若唯不生是
涅槃者此經文句當云何通經言
五根若修若習若多修習能令過
去未來現在衆苦永斷此永斷體
即是

の永断の体が涅槃であると説くのに對し、經部は永断の断と
いうのは実は未來の体を遮断するのだという。無爲無因果論
についての有部と經量部の對論は広範なものとなっている。
六因四縁を立てる有部であるが、『阿毘達磨俱舍論』卷六
(T. 29.30. a)では六因説については、「許」の字で疑いを示
す。四縁説は仏説として異論がなかったようである。ここで
は等無間縁について、欲界に善、不善、有覆無記、無覆無記
の四心、色界には善と有覆無記、無覆無記の三心、無色界も
色界と同じく三心があり、これら十種の心は有漏だという。
無漏には學と無學の二心があり總計十二心となる。以下、俱
舍論は十二心の相性について説明する。

以上、s. 249 に遺された『阿毘達磨俱舍論』抄出の要文に
ついて検討してみた。このスタイン本は『阿毘達磨俱舍論』
卷八より一文、卷二五より二文、卷一六より一文、卷一九よ
り一文、卷二一より一文、卷二三より一文、卷二四より一文、
卷二五より一文、卷二七より一文、卷二八より一文、卷二九
より一文、戻つて卷二三より一文の總計一三文を抄出したも
のである。s. 249 の背面には更に『阿毘達磨俱舍論』卷九よ
り一文、卷一一より一文、卷数不明の一文も書写されている。
小論は紙面の關係により俱舍論全体から見れば前半部分、界
品、根品の雜抄に言及するに止めた。しかし、これら僅少の
雜抄を調べて判明したことは、スタイン本 s. 249 の筆写に

係つた人は単に俱舍論の論文を自在に引用書写しているのではなく、アビダルマ教学の矛盾を持つ諸項に意を注いで俱舍論の要文を抄出しているのである。この俱舍論雜抄の主眼は經經部の思想、即ち、著者である世親の主張する瑜伽、唯識的思想を俱舍論から抄出する作業を行つていたものと考えてよい。

四、おわりに

敦煌出土の仏教文献の中から、アビダルマ関係文書に注目し、諸論雜抄が遺されている意義について考察した。大部のアビダルマテキストから、議論の一部を抄出して書写するという作業は可成りの専門的知識を必要とする。敦煌圏でそれがなされているということは、敦煌仏教の教学組織の卓越性が、又は敦煌圏を中心とする国情の変化とこれに伴う教学再編の急務かのいずれかであろう。

吐蕃は天宝末の反乱に乗じて七六三年、長安を占拠し、河西の諸都市を次々と陥落させて七八一年には敦煌を含む河西全土は完全に吐蕃の支配下に入った。河西の諸都市にいた僧尼も、東から西へ流れて敦煌に至つた。吐蕃王チソンデツェンは吐蕃仏教の発展のため僧尼に命じて学習させ、また使役に従事させた。このことを考えると、敦煌の地の吐蕃化と共に、敦煌の地の吐蕃仏教化が急速に進められたと考えることがふさわしいと思う。

すでに述べたように敦煌では、この地独自の仏教經論が編纂されていた。法成の一連の四法經論広積は大毘婆沙論を引用し依用して出来ているし、未渡の書『眞實論』もチベットから河西一帯に及ぶ仏教圏で学ばれたテキストであつた。

この小論においては、大毘婆沙論の修行道とその実践法のための要文の抄出、又、大毘婆沙論序にみられる中原仏教への反駁、俱舍論雜抄の要文に窺われるアビダルマ教学に反論する經量部師の主張など、従来、敦煌圏で学習され、利用されていつた吐蕃仏教の様子が多少なりとも明らかにされたのではないかと思う。

(キーワード) 敦煌、阿毘達磨、法成

(相愛大学教授)